

BCG と結核

結核は、18世紀以降都市化が進むと世界中で爆発的に流行するようになり、日本では江戸時代から明治時代以降に本格的に流行しました。現代の先進国では衛生水準や栄養状態が改善したので結核がまんえんすることはなくなりました。しかし結核は決して過去の病ではなく、特に乳幼児では粟粒結核^{せくりゅう}という激的な肺結核や結核性髄膜炎を発症することがあります。BCGはこれら小児の結核を予防するための予防接種です。

結核の予防接種は1919年、フランスのカルメット(Calmette)とگران(Guerin)が毒性の低い結核菌を開発したことにより始まりました。この菌はカルメット・گران菌(Bacille Calmette-Guerin)、頭文字を取ってBCGと呼ばれ、世界中で結核の予防接種に用いられています。英国での研究によると、BCGは乳児において80パーセント近い感染予防効果を有することが示されています。以前はツベルクリン反応(ツ反)陰性の幼児にBCG接種をしていましたが、今ではツ反を廃止して生後3か月から6か月未満のすべての乳児にBCGを直接接種しています。

BCG接種を行うと、2週間から1か月後くらいの間^{しゅちょう}に発赤や腫脹が見られ、ジクジクして膿^{うみ}や痂皮^{かひ}(かさぶた)ができることもあります。そのまま清潔に保ってください。ひどく化膿^{のう}しない限りは正常な反応ですので心配はいりません。逆に、十日以内に上記の反応が出始めたときは「コッホ現象」という結核に関係した症状ですので、かかりつけ医または保健福祉センター健康づくり推進課に相談して下さい。

(このコラムは市立病院 病院総務課 電話(260)0111が担当しています。)